

風の盆は、二百十日の風をおさめ、五穀豊穡を祈ることから始まった。その代表的歌詞である「八尾四季」は栃木県日光出身の歌人 小杉放庵 が昭和3年に八尾に招かれ、作詞したものである。

作詞 80 周年を記念して栃木文化センターで特別公演が開催された。



1500の座席はほぼ満席、公演は歴史的背景の紹介に始まり、踊りの実演、フィナーレは舞台と客席が一体になったの踊りが繰り広げられた。

昨年9月に地元新聞社主催のバスツアーで行った風の盆の感動的な記憶がよみがえった。

2007年 9月 2日

7:00 小山駅前を観光バス2台で出発。途中休憩を取りながら長岡から北陸道を走る。新潟中越沖地震の直後でもあり、柏崎付近の道路はアスファルトの路面が波打ったように上下にうねり、一車線の徐行運転、付近の電柱は傾き、ブルーシートで屋根を覆った家が何軒もあり、地震の凄まじさを見せ付けられた。

バスの中では添乗員の方が、花瓶に生けた真っ白な酔芙蓉の花を見せながら、風の盆とこの花がなぜ悲恋の題材になるのか、いろいろ解説してくれた。酔芙蓉は夕方になると、ほのかなピンクに染まって萎れてゆく、かなわぬ恋の象徴、ムクゲやハイビスカスと同じ仲間、真夏に1日だけ咲く花だ。映画『男はつらいよ』の寅さんとリリーの恋物語を思い出した。

富山を経て八尾 16:00 着。



< 河岸段丘の上の八尾の町並み >



街の通りでは、各町内の踊りの列が行き交う。お囃子と花火のエネルギーな盆踊りと違い、過ぎ行く夏を惜しむような哀愁を帯びた胡弓の音色が町の中に響き渡り、別世界のようなであった。

23:00 八尾発、夜行便で小山には9月3日朝帰着。帰路、参加者全員に小説『風の盆恋歌』と酔芙蓉の苗木が配られるなど、さすがに新聞社らしい企画のツアーであった。添乗員も風体から元は旅行社に勤務、文学の旅が好きで、今は新聞社専属のガイドとして仕事を楽んでいるように見えた。一般の旅行社とは一風違った、的をしぼった企画が売り物。いい旅ができた。



< 酔芙蓉 >

今回の公演の収益で今年の8月に八尾に小杉放庵の歌碑を建てるとの説明が最後にあった。

ツアーの時にもらった酔芙蓉の苗木は元気に育っている。今年もぜひ行ってみたい。